

アート実践による地域文化との応答  
制度と子どもに挟まれた持続的リミナル空間の考察  
— 苫小牧市美術館子ども広報部びとこまの事例 —

藤沢礼央

キーワード：アート実践・持続的リミナル空間・閉じ方・生成変化・自律

## 要旨

本研究は、〈苫小牧市美術館子ども広報部びとこま（以下 びとこま）〉における実践を対象として、制度と非制度の狭間に成立するアート実践の生成的プロセスを文化人類学的視点から記述・分析するものである。従来、地域におけるアート実践は、「地域を開く」といった社会包摂的・活性化の言説のもとで語られてきた。しかしその一方で、制度に包含されることによって実践が形式化・機能化し、創造的契機が失われる可能性については十分に検討されてこなかった。本研究は、制度から単純に逸脱することでも、制度に完全に従属することでもなく、その狭間において生成的に展開するアート実践の在り方を捉えるため、「持続的リミナル空間」と「閉じ方」という概念の理論化を試み、地域文化の持続可能性にどのように寄与し得るのかを明らかにする。

序章では、施設と協働する民間組織〈樽前 arty〉から〈びとこま〉へ至る実践史を踏まえ、地域芸術祭や協働型アート実践が制度・地域社会・文化生成に与えてきた影響を整理した。そのうえで、公設文化施設においてアート実践がどのように制度と交差し、同時にその境界をどのように捉えているのかという研究対象を設定した。

第1章では本論で頻用する「アート」について定義した。美術、芸術との意味性においては重なりながらも応答的生成のプロセスを媒介し、関係や経験を変容させる創造的実践の総体であることを示し、後に続く考察の土台とした。

第2章では、ターナーのリミナリティ論、中沢の芸術人類学、レヴィ＝ストロースのブリコラージュ、インゴルドの応答的生成論、ドゥルーズ＝ガタリの生成概念、さらに國分功一郎の中動態論を参照し、創造を固定的主体による産出ではなく、素材・身体・他者・制度との応答的関係の中で生成する運動として捉える視座を整理した。リミナル状態が儀礼的に一時化されるのではなく、境界を調整し続けることで持続する場として現れる可能性を提示し、これを「持続的リミナル空間」と捉えた。

第3章では、苫小牧の地域史・文化史・苫小牧市美術館設置までの沿革を整理し、制度形成の背後に連続してきた市民運動と草の根的文化実践を明らかにした。その文脈の中で〈びとこま〉が、制度的文化施設の内部にありながら、市民主体の文化形成の延長線上に成立した実践であることを確認した。

第4章では、質的データと参与観察にもとづき、子どもの自律的な創造行為、大人（運営者・学芸員・保護者）の再自律的变化、制度運用の応答的変容という三つの層を描き出した。そこでは、指導や評価を前提としない「教示の不在」の場が成立し、技術や感覚が観察と模倣を通じて自然に継承されていた。また、校正・成果指標・時間統制等の慣習が手放され、制度自体が現場実践に応じて再編されていた。

第5章では分析の結果、〈びとこま〉は制度内部に吸収もされず、外部へ逸脱もせず、挟まれた位置に留まり続けることを通じて、生成を持続させていることが明らかとなった。ここでは、すべてを開くのも閉じるのもなく、接触と遮断を選択的に調整する実践が確認され、その戦略的態度を「閉じ方」として概念化した。

第6章の考察では、〈びとこま〉を、制度改革の外部からの抵抗でも、教育普及の内部強化でもなく、制度の未来可能性を試作するアート実践として位置づけた。子どもの自律性は制度を破壊するのではなく、制度を再解釈へと開き直す触媒として作用していた。

地域文化実践における創造の生成プロセスを、「持続的リミナル空間」「閉じ方」「自律・再自律・制度変形の三層モデル」という概念を通して理論化し、制度と芸術実践の二項対立を超える視座を提示した。

終章の結論では、各章の考察を概観しつつ、ひとつの小さなアート実践が地域文化の将来像を試作する場として機能し得ることを明らかにした。制度の狭間にとどまり続けることで、駆動し続ける生成の在り方は、変化の時代を生きる私たちに対して、文化と社会の関係を別様に想像し直すための手がかりとして立ち上がった。

最後には社会的含意として、文化政策・教育・美術館実践における「応答的な制度運用」および「子どもの自律性を媒介とした変容の可能性」を指し示し、地域における公共文化の「少し未来の日常」を構想するための可能性が開かれた。